様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ５ 月 ２８ 日現在

機関番号：１２６０１
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2016～2019
課題番号：１６Ｋ１２５４３

研究課題名（和文）日本の洋式製本の技術伝播に関する歴史的研究 ： 洋装本資料保存のための基盤整備

研究課題名（英文）Historical research on the spread of western style bookbinding in Japan : establishing a platform for conservation western style books

研究代表者
森脇　優紀（Moriwaki, Yuki）

東京大学・大学院経済学研究科（経済学部）・特任助教

研究者番号：９０７３３４６０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、明治期日本の洋式帳簿製本と、明治期に製本技術を習得した技術者による1950年代の修復痕が残る西洋稀覯書の現物調査を中心に、聞き取り調査による情報収集や記録資料の解析も並行して行い、製本の歴史的変遷を再検討した。その結果、帳簿製本については、技術導入以降、需要が高まり民間での製造が急増したことで、西洋由来の技術は試行錯誤が繰り返されて変容し、現在の日本特有の形に至ったことが分かった。稀覯書の修復痕調査からは、明治の導入期以来の技術や知識が基本的な部分で継承されていることが確認できた。資料保存の面では、現在の「原形保存」の淵源となる考え方が既に1950年代に存在していたことが分かった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究の学術的な意義は、史的研究と併せて聞き取り調査から得られた情報や現物資料の技術的痕跡をも検証材料とし、これまでの帳簿製本技術史の研究に新たな視座を提示し、今後の製本技術史に関わる諸研究のための基盤を構築し得た点にある。
また現物資料から素材や製本構造等の製本技術の特徴を明らかにし、西洋から導入された製本技術が日本的なものとへ変容を遂げる過程を跡付けたことは、今後の日本における洋装本の補修や保存、すなわちコンサベーション技術の向上に寄与するものと考える。これは、研究成果を図書館実務の現場に還元するにとどまらず、文化資産としての図書の保護への寄与という社会的貢献につながる研究であると確信する。

研究成果の概要（英文）：We focused on a physical survey of Western account books in the Meiji era and the Western rare books with traces of restoration in the 1950s by the bookbinders who acquired the Western technology in the Meiji era. At the same time, we amassed information by interviews from technical experts, conducted a philological survey and reexamined the history of Western bookbinding. As regards to account books, the technology derived from the West was transformed by repeated trial and error due to the rapid increase in demand and private-sector makers, and finally it has attained the styles peculiar to Japan.
In addition, from the physical survey on the traces of the restoration in the Western rare books, it was confirmed that the technology and knowledge since the Meiji era were basically passed down. In terms of conservation of materials, it was revealed that there was already an idea in the 1950s which was the source of the existing idea of the "preserving original style".

研究分野： 西洋書誌学

キーワード： 製本技術史　洋式製本　ステーショナリー・バインディング　帳簿製本　レタープレス・バインディング　資料保存　西洋古典　W. F.パターソン

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

日本では、明治維新以降、欧米の知識・技術習得を目的に、洋書が大量に輸入された。これに伴って西洋の製本技術も、1873（明治 6）年に印書局に雇われた W.F.パターソンによって導入され、水野欽次郎や徳屋敬忠、上原金次郎が技術を伝授された。こうした日本の製本技術の沿革については、『印刷局五十年略史』（印刷局、1921 年）や『共同製本と金子福松』（金子洋二編、共同製本、1962 年）、『東京製本組合五十年史』（高橋為蔵・高橋秀三編、東京製本紙工業協同組合、1955 年）等に簡潔に記されるのみで、西洋の技術が日本特有の「洋式製本」技術としてアレンジされ、いかにして技術の伝播がなされたのか、さらに合冊製本をメインとしたいわゆる図書館製本が、そこからどのように派生してきたのかなど、具体的な製本技術史およびその系譜は、これまで明らかにされてこなかった。

一方、古い洋式製本は劣化が進行し、その対応に図書館は苦慮している。これらの適切な修復・保存は、各時代・各技術者の製本技術の特徴を理解して初めてなし得るが、現状では、ほとんどの場合、それらを全く考慮せずに再製本がなされるか、手つかずのまま放置されている。

こういった現状に鑑みるに、洋式製本の技術的系譜を明らかにすることは、純粋に学術的な関心にとどまらず、今後の図書館等における資料保存を考える上でも、もはや避けては通れない課題であり、研究の必要性が高いと判断された。

２．研究の目的

本研究の目的は、これまで等閑に付されてきた日本における洋式製本の系譜を技術史および技術伝播の観点から俯瞰し直し、洋装本を適切に保存・活用してゆくための学術的な基盤整備を行おうとするものである。このために、以下 3 点の課題を設定して調査・研究を行った。

① 現物資料の調査と製本技術者からの聞き取りによる、洋式製本技術情報の集積と分析
② 稀覯本修復記録の考証による洋装本修復史への文献学的アプローチ
③ ①および②に基づいた日本における洋式製本の技術系譜の史的追究と資料保存への応用

３．研究の方法

製本技術について、記録資料のみから実証的に研究・解明することは難しい。なぜならば、製本技術のように体で覚えて身につけるという側面が強いものづくりの世界では、記録資料は残りにくいからである。一方で、技術の痕跡は必ずモノに残るため、その痕跡をたどることで、技術の復元やその伝播を史的に考察するための証拠を見出せる可能性がある。このように、技術史を繙くには、現存する物（現物資料）による調査が不可欠となる。また、オーラルヒストリーのように聞き取り資料を記録資料に準じて用いる手法も、記録資料の少ない本研究にとって不可欠な分析手法である。以上を踏まえて本研究では、以下 3 つの手法によってアプローチすることとした。

A. 現物資料の調査、訪問実態調査および聞き取り調査
B. 現存する記録資料の考証による文献学的研究
C. A と B の検証に基づく史的追究

A. 現物資料の調査および聞き取り調査

書物の製本様式には、あらかじめ印刷された「読むための本」の製本（レタープレス・バインディング）と、帳簿など製本されたものに「書くための本」の製本（ステーショナリー・バインディング、以下、帳簿製本）の 2 種類があり、その技術や製本構造は異なる。日本に西洋の製本を導入したパターソンも、この 2 つの製本技術を教授したとされる（洋式製本）。そのため、本研究課題遂行には、両製本に関する現物調査が必要となる。

帳簿製本については、洋式製本の導入時により近い時期の帳簿を調査対象とし、それらの製本構造・使用された紙（料紙）の材質等・保存状態の調査を実施した。

一方のレタープレス・バインディングについては、一橋大学社会科学古典資料センターと東京大学経済学図書館の西洋稀覯書を対象とし、それらの製本構造と修復痕調査を実施した。この 2 機関は、1950 年代の同時期に、所蔵する西洋稀覯書の修復事業を実施しており、さらにそれらの修復は、明治期に西洋の製本技術を習得した職人が手掛けている。つまり、これらの稀覯書には、古い西洋の製本技術に、日本の製本家の技術が合わさっており、こういった西洋稀覯書に残る日本の洋式製本技術を駆使して施された修復の痕跡には、日本における製本技術の系譜・歴史を繙く手がかりが残されているからである。

上記の現物調査は全て、資料の解体などを伴わない非破壊調査である。ただし、調査対象の資料は全て製本された書物であり、破損や傷みがない限りは、内部の構造や構成材料を見ることができない。そのため、当該現物調査から得られる情報には限界があることは否めない。そこで、こうした不足を補うため、国内外の書物の修復技術者や図書館職員から、具体的な製本の技術および関連する知識について直接教示を受け、種々の技術を実際に体得する機会も得た。併せて、製本技術の歴史的情報の不足を補うため、修復技術者、図書館職員、関連する研究者などをインフォーマントとする聞き取り調査を行い、情報の収集と分析に努めた。

一方で、比較史的な観点から、レタープレス・バインディングの技術に伝統と歴史を有し、かつ資料保存の分野で世界的に大きな影響を与えているイタリアにて、Societa Geografica Italiana, Biblioteca Nazionale Centrale di Roma, Laboratorio di Restauro (Bibliotaca Nazionale Centrale di Firenze),

Bibliotaca Nazionale Marciana の訪問実態調査を行った。

B. 現存する記録資料の考証による文献学的研究

東京大学経済学図書館には、明治期に技術を習得した製本家の最晩年の仕事である「アダム・スミス文庫」の修復に関する詳細な記録（以下、「覚書」）が、一橋大学社会科学古典資料センターには、修復事業に関連する事務書類が残されている。これらの記録資料と現物資料との関係を明確にすることで、各書籍の製本構造や修復方法をより詳細に調査・分析した。

C.　A と B の検証に基づく史的追究

上記の A と B の調査・研究を基に、明治以降の日本の製本技術の系譜を考究し、西洋の製本技術の史的研究にも留意しながら、世界の製本技術史に日本の洋式製本技術を位置づけようと試みた。さらに、現物調査による素材や製本構造や修復痕等の技術情報、記録資料や聞き取り情報の総合的な分析を通じて、図書の資料保存のあり方やその歴史の一端を繙いた。

４．研究成果

（1）帳簿製本に見られる、日本における洋式製本の技術の系譜と変容

現在一般に定義されている西洋由来の帳簿製本の主な特徴は、以下の通りである。①長期保存や頻繁な利用（頻繁な開閉）に耐え得る強度を備えている、②書き込む際にノド（本の綴じ目の側）まで平らに開き、閉じる際にも本の背などの形を崩さずに閉じられる、③特に会計帳簿などには、ページ数の抜き取りや入れ替えなどの不正行為防止のために、本体小口にマーブル模様を施す場合がある、④制作にあたって、背を丸く作る工程（ラウンディング）は行うが、レタープレス・バインディングにみられるような背と小口の厚みの誤差を固定させる工程（バッキング）は行わない。この他に、⑤見返しのノド部分にはクロスを貼り、その上から見返しを本体と綴じるために糸で綴じることも、特徴の一つと言われている。

実は、帳簿に施される製本は、出現当初からこうした特徴を有していなかった。実際に、フィレンツェ国立文書館所蔵の 16 世紀のメディチ家の収支会計帳簿（Mediceo Avanti il Principato, Filza 132）に見られるように、初期の帳簿は、本体に表紙を縫い付けて接合する構造で、手早く安価でできて素朴であるが丈夫な装丁であった。また、情報の保護のために、表紙の装丁には、エンヴェロープ・フラップのついたヴェラム（仔牛の皮）が用いられた。同時代の絵画資料にも着目すると、マリヌス・ファン・レイメルスワーレ作『二人の徴税人』（1540 年代）に帳簿が描かれており、当時は、平らに開かない構造で、書き込みにくいものであったことがうかがわれる。

1799 年頃、帳簿製本におけるターニングポイントが訪れる。イギリスのジョン・ウィリアムスとジョセフ・ウィリアムスが、厚紙でできた分厚くて硬い C 字型の背表紙の芯材であるスプリング・バックを発案した。この新しい技術が帳簿製本にも導入されるようになり、上記の帳簿の特徴①や②にある、本が開きやすく、書き込みやすい構造へと発展した。さらに、スプリング・バックにレヴァーズ（厚紙を本体に綴じ込まれた紙 1 紙に巻き込んで貼り合わせたもの）を組み合わせることで、本がより開きやすくなるように力がはたらき（バネが効いて）、本の開きがフラットになって書き込みがしやすくなり、また頻繁な開閉に耐え得る強度が備わるようになった。これらの技術の登場により、現在の帳簿製本の特徴（特に①や②）が確立されていったと考えられる。明治初期にパターソンが日本で紹介・教授した技術の一端は、こうした帳簿製本技術に基盤があるものと考えて差し支えないであろう。

本研究では、実際の工程について、文献資料のみならず、技術者から次のように現在の技術の手ほどきを受けることで理解を深めた。①本の綴じの支持体と厚紙を、本体に綴じ込まれた紙 1 紙に巻き込んで貼り合わせてレヴァーズを作成する。②本の重量に耐え、開閉がしやすいように力がはたらく構造にするために、本体の背とレヴァーズを覆うようにして革を貼る。③スプリング・バックの内側にクロスを貼り、それをレヴァーズに貼り合わせて接合する。（本体の背側とスプリング・バックは直接貼り合わせない）④表紙の芯材（表紙ボード）に隙間を開けておき、そこに③でスプリング・バックとレヴァーズを接合したものを挿入して貼り合わせる。⑤スプリング・バックの外側と表紙の背側（あるいは表紙と背表紙全体）に、帆布やクロスなどを貼る。

現物調査では、洋式製本導入期すなわち明治初頭に製造・使用された洋式帳簿を調査対象とし、日本銀行貨幣博物館所蔵の「九号一円発行紙幣記入帳」、小樽市総合博物館所蔵の住吉屋西川家文書洋式帳簿類、一橋大学附属図書館所蔵の日本郵船株式会社会計帳簿類、野崎家塩業歴史館所蔵の帳簿類について、製本構造・料紙・保存状況の詳細な調査・測定・写真撮影を行った。なお、日本郵船株式会社の会計帳簿類はイギリスで製造された輸入品であり、当時の本場の西洋の技術と日本に導入され伝播した技術との比較検討につながった。

製本構造の現物調査から、以上の帳簿には、①フラットに開いて書き込みがしやすい構造をもち、②開閉時には背の形が崩れずに保たれ、③見返しノドにはクロスが貼られて綴じ糸がみられ、④本体小口にはマーブル加工がされるなどの特徴が共通してみられた。すなわち、これらの帳簿は、西洋由来の帳簿製本の特徴を備えているといえる。実際に、レヴァーズとみられる厚紙や、本体の背とレヴァーズに貼られる革など、帳簿製本に必要な材料も、目視や触指によって確認された。このように、明治初頭に製造された日本の帳簿は、は西洋由来の帳簿製本の特徴と概ね同様であることが分かった。

ただし、それぞれの帳簿には細かい差異も確認された。例えば、通常であれば表面上には

見えないはずの本体の背とレヴァーズに貼られる革の跡（形）が盛り上がって見えているケースがあげられる。こうした形式・形態上の差異は、帳簿製本の技術が民間にも伝わり、各地に伝播していく中で生じた工程上の差異だと考えるに至った。

パターソンの直弟子として、水野鉄次郎、中屋東三、徳屋敬忠、上原欽次郎が知られているが、このうち、水野は、独立後に日本橋で帳簿の製造を開始し、中屋は、独立後に中屋印刷を開業し、銀座で帳簿の販売を行なった。このように、パターソンの弟子たちが独立して帳簿の製本業を始めたことは、西洋由来の帳簿製本の技術が、民間にも広まっていく一つの契機となった。1878 年には、「計算簿記条例」によって官庁や銀行で洋式帳簿の導入が義務付けられたことで、洋式帳簿の使用がますます本格化し、国内での需要が一気に高まった。さらに 1880 年代後半には、全国的に企業設立ブームが起こり、株式会社が増加したことで、帳簿製造の注文が増加していく。それまで紙幣寮、すなわち政府主導で製造していたが、注文の増加により対応しきれなくなったことから、大蔵省で使用する帳簿以外は、民間での製造や輸入に託すこととなった。同時期の日本郵船の帳簿が輸入品であったことは、これを裏付けている。

東京でも 1897 年前後から急速に帳簿の製本所が増加し、大規模な印刷屋も帳簿の製本部を設立し、職人を雇って弟子の養成を始めた。例えば 1904 年創業の伊東屋（現 ITOYA）は 1909 年より販売を開始、1905 年に和式帳簿の表紙店として開業したコクヨは 1913 年には洋式帳簿の製造を開始している。また、実際に調査した小樽市総合博物館所蔵の洋式帳簿からは、札幌に文榮堂という製造業者が存在したことが確認でき、民間での帳簿製造が全国的に広まっていたことが裏付けられる。以上のことから、帳簿製造が官から民へと広まり、製造に携わる人物が急増したことで、パターソンによる西洋由来の帳簿の製本技術や工程が、徐々に日本独自のものに変換しつつ国内に広まっていったと考えられる。

こういった変容の結果、現在の日本における帳簿製本の標準的な工程は以下のようになっていることが、聞き取り調査の結果から明らかとなった。①見返しと本体とを接合する前に、先に見返しの中央にクロスを貼って丈夫にし、本文 1 紙目の外側と見返しの外側を全面糊付けにして接合する。②厚手の紙でできた「バネ」を背の近くに貼り込み、その後に紙を背に貼り込む。③「浮かし」と呼ばれる紙を、背部分には糊をつけないようにして貼り、④表紙の板紙（表紙ボード）を、それぞれ別々に貼った後、⑤背に「クータ」を貼り付ける。

この工程には、先述の西洋由来の帳簿との違いが明確に見られる。例えば、②の「バネ」とは、西洋の帳簿製本のレヴァーズに相当すると考えられる。⑤の「クータ」は、厚い板紙を丸い形に成形したものである。スプリング・バックの機能を備えていると思われる。なお、この「クータ」は、レタープレス・バインディングで用いられる背固めのための「クーター」とは別物である。レヴァーズは、本体に接合した見返し紙を巻き込んで作られるが、「バネ」は見返し紙を巻き込んで作らずに、背の近くに貼り込まれている。また、西洋由来の帳簿では、スプリング・バックとレヴァーズはあらかじめ貼り合わせた状態で、表紙ボードと接続するが、現在の日本の帳簿製本では、「クータ」は「バネ」とあらかじめ貼り合わせることはなく、それぞれ別々に本体と接合する仕組みになっている。

こうした「日本的変容」は、時代が進むにつれて需要が増えて民間でも製造されるようになったことで生じたものと考えられる。民間での製造が盛んになると、コクヨの例のように、本来洋式帳簿を専門としなかった業者も洋式帳簿の製造に着手していることからも分かるように、欧米から導入された技術をそのまま受容するだけではなく、自分たちの持っている技術を駆使しながら、より製造しやすいように試行錯誤し、工夫が凝らされていくなかで、現在の日本における帳簿製本の形（製本工程・用語）に至ったといえよう。

なお、本研究では、現在の日本における帳簿製本が確立された具体的な時期や契機を明らかにすることができなかった。本研究の対象外であった、明治後半から昭和にかけての帳簿製本についての調査・研究が今後の課題となる。

（2）西洋稀覯書の修復痕調査に見る洋式製本技術の系譜と洋装本修復（資料保存）の歴史

レタープレス・バインディングに関する調査・研究については、現物調査に重点を置き、洋装本に残された修復痕を分析した。これにより、諸師（もろし）と呼ばれる、手綴じによって注文者の好みに応じた製本や仕立て直しを専門に行う製本技術者が身に着けていた製本技術や、彼らによる資料修復の実態を考察した。調査では、一橋大学社会科学古典資料センターと東京大学経済学図書館の西洋稀覯書を対象とし、それらの製本構造と修復痕調査を修復の専門家に協力を得て実施した。また調査に際しては、「洋書修理痕調査カルテ」を独自に作成し、資料 1 点ごとに調査情報を記録した。カルテには、表紙、背、綴じ、見返し、ノド、中身（本文紙）の 6 項目に分け、項目ごとに、構造と材料、修復の有無と劣化状態を記録できるようにした。特に、表紙と見返しについては、元の材料をどの程度残しているのかを基準に、いくつかの特徴的な修復のパターンを区別して記録できるようにした。

一橋大学の調査では、1950 年代に修復が施された西洋稀覯書のうち 97 点を抽出し、中林安右衛門（中林製本所）、荒井鎮六（荒井製本所）、服部政祐が担当した資料をそれぞれ 30 点前後になるように調整し、各製本技術者の手法の違いを比較した。調査から、修理を担当した製本技術者によって、製本構造への考え方や修復の材料、方法等に大きな違いが見られた。特に見返し等の内部構造の修復については、手法の差が顕著で、服部が見返しの交換を最小限に抑えてオリジ

ナルをできる限り用いようとしていたのに対し、中林と荒井は積極的に交換を進めていたようにみえた。また見返しの綴じ直しは、各人とも行っているが、服部は元の構造に忠実な綴じ直しをしているのに対し、中林と荒井は自身が好む手法で行う傾向にあることが確認できた。こうした違いが生じた理由として、発注者である図書館では、できる限り元の状態を損なわないように修復するという、現在の「原形保存」に近い考え方を当時持っていたようだが、実際には、修復の方法、材料、元装丁の保存に関する条件や方針を一貫した指示として、技術者側に明確に示していなかった可能性が考えられる。

一方、東京大学では、経済学図書館所蔵の「アダム・スミス文庫」303 点の製本構造調査および、1950 年代に修復を施した服部政祐の修復の痕跡を調査した。また、調査で得られたデータと、当時の修復事業に関する記録資料である「覚書」にある作業内容との比較も行った。調査の結果、基本的な修復・製本の諸行程における技術は、現在の技術と大幅に異なっていないと考えられる。服部が、明治期の洋式製本（レタープレス・バインディング）の技術を学んだ最後の世代であることを考慮すると、パターソンによる導入期の西洋由来の技術は、基本的な部分において、1950 年代の諸師の製本・修復の技術、そして現在の製本・修復にまで継承されてきたと考えることができる。

一方、資料保存の観点からすると、表紙・背表紙の解体・復元作業の際に、表装の革をぬるま湯でふやかす作業や、簡易修復に用いられた薄く漉いた革や背固めに使用した糊や接着剤などの材料については、現在の保存・修復の考え方では決して適切とは言えない場合もある。このことから、1950 年代当時は、保存の観点からの製本や修復については、考え方や技術、使用する材料に関する選定基準などが、まだ確立されていなかったと考えられる。

また、調査と並行して、「覚書」について精読した上で、文献学的アプローチにより校訂・注釈を施して公刊した。その内容からみるに、この修復事業では、厳密な「原型保持」で実施することが指示されていた。これは、1966 年のフィレンツェの水害を契機に国際図書館連盟が 1979 年に『資料保存の原則』を公表したことで普及していった「原形保存」に先行していることになる。図書館界に先だって芸術作品などの文化遺産の保護・修復については、「原形保存」の考え方が提唱されており、その起源は、イタリア政府の中央修復研究所を創設したチェーザレ・ブランディの修復・保存の考え方に遡る。これはあくまでも文化財を対象とするものではあるが、1950 年代の日本でもこうした考え方が一部で認識されており、図書館界にも応用されたと可能性が考えられる。今後も更なる研究が必要ではあるが、本調査から、図書館における資料保存の歴史を繙く上で重要な情報が得られた。

以上、1950 年代における修復の実態から、技術の変遷や資料保存の考え方について手がかりを得ることができた。1950 年代の製本技術そのものについては、パターソン以来の西洋由来の技術が受け継がれてきたと考えられる。一方、資料保存については、当時も「原形保存」に近い考え方はあったが、それはオリジナルにできる限り近づけて復元することであったと考えられる。また、保存の観点を踏まえた考え方や技術が十分に確立されておらず、修復の材料や工程の一部に問題があり、現在の劣化の要因になっている場合もあることも否めない。しかし、日本において資料保存の考え方が本格的に議論されるようになるのは、1980 年代以降のことであるから、この時代に「原型保存」を掲げた修復作業が行われていたことは、日本の資料保存の歴史において特筆されるべきであろう。

なお、研究期間中には、シンポジウム「教育・研究資源としてのデジタルアーカイブ：その管理・活用・保存」（於：東京大学）、国際シンポジウム・ワークショップ「東南アジア地域研究情報資源の共有化をめざして」（International Workshop: Collaborative practice for establishing a base of academic information between Japan and the three countries in Indo-china : Towards Sharing the Information Resources of Area Studies for Southeast Asia）（於：ベトナム社会科学アカデミー・社会科学情報院）、特別展示「Adam Smith in action : アダム・スミスの思想形成過程とその東アジアへの波及」（於：東京大学）などを共催し、研究成果の社会への発信に努めた。このうち展示については、展示図録も作成しデジタル公開することで、研究成果を社会に還元した。

＜引用文献＞

① 安形麻理、西洋の製本の歴史と研究動向、東京大学経済学部資料室年報、10 号、2020、2-11
② 森脇優紀、「読むための本」と「書くための本」―帳簿製本（ステーショナリー・バインディング）、書物の装い、2019、71-82
③森脇優紀、1950 年代日本における西洋稀覯書の修復技術とその方針 ： 東京大学経済学図書館所蔵「アダム・スミス文庫」を事例として、東京大学経済学部資料室年報、10 号、2020、12-23
④森脇優紀・福田名津子校注、小島浩之解題、「1950 年代のアダム・スミス文庫に関する覚書」校注、東京大学経済学部資料室年報、9 号、2019、15-38
⑤床井啓太郎、1950 年代の大学図書館における西洋古刊本の修復、東京大学経済学部資料室年報、10 号、2020、24-36
⑥小島浩之、モノを読み解くための覚書 ： 調査票（カルテ）から考えるコンテンツ・コンテクストと定性・定量、東京大学経済学部資料室年報、10 号、2020、37-47

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計24件（うち査読付論文　4件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　19件）

１．著者名 安形麻理	４．巻 10
２．論文標題 西洋の製本の歴史と研究動向：日本の大学図書館が所蔵する資料の取り扱いの理解にむけて	５．発行年 2020年
３．雑誌名 東京大学経済学部資料室年報	６．最初と最後の頁 2-11
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15083/00079155	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 森脇優紀	４．巻 10
２．論文標題 1950年代日本における西洋稀覯書の修復技術とその方針 ： 東京大学経済学図書館所蔵「アダム・スミス文庫」を事例として	５．発行年 2020年
３．雑誌名 東京大学経済学部資料室年報	６．最初と最後の頁 12-23
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15083/00079156	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 床井啓太郎	４．巻 10
２．論文標題 1950年代の大学図書館における西洋古刊本の修復	５．発行年 2020年
３．雑誌名 東京大学経済学部資料室年報	６．最初と最後の頁 24-36
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15083/00079157	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 小島浩之	４．巻 10
２．論文標題 モノを読み解くための覚書 ： 調査票（カルテ）から考えるコンテンツ・コンテクストと定性・定量	５．発行年 2020年
３．雑誌名 東京大学経済学部資料室年報	６．最初と最後の頁 37-47
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15083/00079158	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 矢野正隆	4．巻 121
2．論文標題 図書館における資料保存の実態と展望	5．発行年 2020年
3．雑誌名 ネットワーク資料保存	6．最初と最後の頁 1-5
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 森脇優紀	4．巻 17
2．論文標題 ヘンリエッタ・マリアの「インデンチャー」(1663年)の西洋古文書学的分析 ：「ホッブズ・コレクション」におけるマニュスクリプト	5．発行年 2019年
3．雑誌名 名古屋大学附属図書館研究年報	6．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 安形麻理	4．巻 81号
2．論文標題 インキュナブラの製本が与えてくれる手がかり	5．発行年 2019年
3．雑誌名 製本倶楽部会報	6．最初と最後の頁 3,6
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 福田名津子	4．巻 67-3
2．論文標題 館内作製サインの逸脱と統制：松山市立図書館・愛媛県立図書館・松山大学図書館における図書館サイン実態調査	5．発行年 2019年
3．雑誌名 経済科学	6．最初と最後の頁 159-166
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18999/ecos.67.3.159	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 小野塚知二	4．巻 734
2．論文標題 東京帝国大学経済学部の創立と社会政策学	5．発行年 2019年
3．雑誌名 大原社会問題研究所雑誌	6．最初と最後の頁 3-28
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 ARIE Daisuke	4．巻 16
2．論文標題 Lost in Translation?: How Japanese Intellectuals Translated Utilitarian Writings in the early Stage of its Modernization	5．発行年 2019年
3．雑誌名 Revue d'etudes benthamiennes	6．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.4000/etudes-benthamiennes.5678	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 森脇優紀・福田名津子校注，小島浩之解題	4．巻 第9号
2．論文標題 「1950年代のアダム・スミス文庫に関する覚書」校注	5．発行年 2019年
3．雑誌名 東京大学経済学部資料室年報	6．最初と最後の頁 15-38
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15083/00079148	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 小島浩之	4．巻 第9号
2．論文標題 ［書評］竺覚暁著『図説 世界を変えた書物 ： 科学知の系譜』	5．発行年 2019年
3．雑誌名 東京大学経済学部資料室年報	6．最初と最後の頁 71-72
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15083/00079152	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 ARIE Daisuke	4．巻 第82巻第3号
2．論文標題 The Wrong but influential Image of Adam Smith in the 20th Century Japan : What the Adam Smith Libraly and Nitobe Suggest	5．発行年 2019年
3．雑誌名 経済学論集	6．最初と最後の頁 23-30
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 森脇優紀・小島浩之	4．巻 8
2．論文標題 カルディン著『日本殉教精華』の古書冊学的研究（1）	5．発行年 2018年
3．雑誌名 東京大学経済学部資料室年報	6．最初と最後の頁 41-55
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15083/00076883	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 森脇優紀	4．巻 －
2．論文標題 外国史料にみる、日本の製紙方法 : Lande著“Art de faire le papier”の試訳	5．発行年 2018年
3．雑誌名 東アジア古文書学の構築―現状と課題―	6．最初と最後の頁 33-36
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 床井啓太郎	4．巻 2017年7月
2．論文標題 西洋古典資料の媒体変換と原資料の保存	5．発行年 2017年
3．雑誌名 月刊IM	6．最初と最後の頁 4-7
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 小島浩之・森脇優紀	4．巻 7
2．論文標題 リネン紙復元実験の試み	5．発行年 2017年
3．雑誌名 東京大学経済学部資料室年報	6．最初と最後の頁 47～54
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15083/00076878	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 森脇優紀	4．巻 106
2．論文標題 図書館員のための西洋古文書ことはじめ－東京大学経済学図書館所蔵の古文書を実例に－	5．発行年 2017年
3．雑誌名 大学図書館研究	6．最初と最後の頁 12～22
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20722/jcul.1492	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 床井啓太郎	4．巻 111-2
2．論文標題 「西洋古典資料の保存に関する拠点およびネットワーク形成事業」について	5．発行年 2017年
3．雑誌名 図書館雑誌	6．最初と最後の頁 86～87
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 床井啓太郎	4．巻 106
2．論文標題 西洋古典資料の保存	5．発行年 2017年
3．雑誌名 大学図書館研究	6．最初と最後の頁 36～43
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20722/jcul.1496	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計16件（うち招待講演　5件／うち国際学会　4件）

1．発表者名 MORIWAKI Yuki
2．発表標題 The Principle of Document Preservation and the Reality (Part 2) : Let's make Origami Wrapper
3．学会等名 International Workshop: Collaborative practice for establishing a base of academic information between Japan and the three countries in Indo-china（国際学会）
4．発表年 2019年

1．発表者名 KOJIMA Hiroyuki
2．発表標題 Material preservation and construction of digital archives
3．学会等名 International Workshop: Collaborative practice for establishing a base of academic information between Japan and the three countries in Indo-china（国際学会）
4．発表年 2019年

1．発表者名 YANO Masataka
2．発表標題 Material preservation and construction of digital archives
3．学会等名 International Workshop: Collaborative practice for establishing a base of academic information between Japan and the three countries in Indo-china（国際学会）
4．発表年 2019年

1．発表者名 小野塚知二
2．発表標題 読まれない歴史、読まれなくなった歴史
3．学会等名 社会経済史学会第88回全国大会パネルディスカッション「「戦後歴史学」後の歴史研究と経済史　―多様化の中の方法論的模索―　」（招待講演）
4．発表年 2019年

１．発表者名 小野塚知二
２．発表標題 東京帝国大学経済学部の創立と社会政策
３．学会等名 政治経済学･経済史学会2019年春季総合研究会「経済学部の成立と日本の学知」（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 有江大介
２．発表標題 The Wrong but Influential Image of Adam Smith in the 20th Century Japan
３．学会等名 経済学史学会
４．発表年 2018年

１．発表者名 森脇優紀
２．発表標題 「読むための本」と「書くための本」―帳簿製本（ステーショナリー・バインディング）―
３．学会等名 慶應義塾大学文学部「文献学の世界 ： 書物の装い」（極東証券寄附講座　秋学期）（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 森脇優紀
２．発表標題 アルノ川洪水から50年のイタリアを訪れて
３．学会等名 公開研究集会「資料保存と製本技術」
４．発表年 2017年

１．発表者名 床井啓太郎
２．発表標題 一橋大学における西洋古典資料保存の取組
３．学会等名 第102回全国図書館大会（第9分科会（資料保存）） ４．発表年 2016年

１．発表者名 床井啓太郎
２．発表標題 西洋古典資料の媒体変換と原本の保存
３．学会等名 第27回保存フォーラム ４．発表年 2016年

〔図書〕　計7件

１．著者名 新里文野，森脇優紀	４．発行年 2019年
２．出版社 Imprensa da Universidade de Coimbra	５．総ページ数 91
３．書名 ジョアニナ図書館 ： 生き続ける図書館	

１．著者名 安形麻理，杉本智俊，佐々木孝浩，大鐘敦子，中谷彩一郎，西川和，酒井由紀子，森脇優紀，田坂憲二，高橋勇	４．発行年 2019年
２．出版社 慶應義塾大学文学部	５．総ページ数 88
３．書名 文献学の世界：書物の装い	

１．著者名 安形麻理、松田隆美、藤本誠、安形輝、永井正勝、井口篤、國本千裕、山田奨治、汐﨑順子、不破 有理	４．発行年 2018年
２．出版社 慶應義塾大学文学部	５．総ページ数 88頁
３．書名 書物の境界（平成29年度　極東証券寄附講座　文献学の世界）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

研究期間中には、2018年に特別展示「Adam Smith in action : アダム・スミスの思想形成過程とその東アジアへの波及」（於：東京大学）を共催し、本研究成果を「特別展示 Adam Smith in action : アダム・スミスの思想形成過程とその東アジアへの波及」(発行年：2018年、総ページ数：17ページ)とし題して図録を作成し、デジタル公開した（doiなし）。

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	床井　啓太郎 (Tokoi Keitaro) (20508650)	松山大学・経済学部・准教授 (36301)	
研究分担者	安形　麻理 (Agata Mari) (70433729)	慶應義塾大学・文学部（三田）・准教授 (32612)	
研究分担者	福田　名津子 (Fukuda Natsuko) (30456305)	一橋大学・人文学部・准教授 (36301)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
連携研究者	小島　浩之 (Kojima Hiroyuki) (70334224)	東京大学・経済学研究科（研究院）・講師 (12601)	
連携研究者	矢野　正隆 (Yano Masataka) (80447375)	東京大学・経済学研究科（研究院）・助教 (12601)	
連携研究者	小野塚　知二 (Onozuka Tomoji) (40194609)	東京大学・経済学研究科（研究院）・教授 (12601)	
連携研究者	有江　大介 (Arie Daisuke) (40175980)	横浜国立大学・国際社会科学研究院・名誉教授 (12701)	